

## 「日本語方言副助詞の研究」の編集にあたって

友 定 賢 治

コミュニケーション活動によって我々は、論理的な意味のやり取りだけでなく、「自分」の内面的な心情や態度を通して、さまざまな思いを相手に訴えかけている。ものごとを主体的に捉え、そのように捉えた自分を相手に投げかけてもいるのである。そして、相手とのかかわりあいの中で、副助詞がコミュニケーション活動につよく作用してくる場合が少なくない。

生きた話しことばとしての方言には、多様な副助詞の生活が見られる。全国に行われる方言副助詞がどうなっているかを展望することによって、方言研究の未開拓分野の発展と、新しい文法論の両方に資することができると考えた。たとえばモダリティー論や「とりたて詞」の問題も、方言の実態と無縁では存在しないはずのものであるからである。

日本語方言の副助詞を全国的に見ようとするとき、『方言文法全国地図』にあるわずかの地図以外は、ほとんど不可能である。俚言形がある場合も、各地の報告に若干記載されている程度である。

さらに、古来の副助詞である「だに、こそ、ばかり」などは、使用する地点や用法が極めて限定されてきており、それらの実態を早急に記録しておく必要がある。

以上の課題をふまえて、本巻では「日本語方言の副助詞」を特集することにした。本資料集では、次のような体系を考え、それぞれの副助詞が文脈中でどのように機能しているかを記述してもらうこととした。

- I 添加・例示・提題などをあらわすもの
- II 分量・程度・基準などをあらわすもの
- III 限定・限界などをあらわすもの
- IV 陳述的なもの
- V モダリティー的なもの

調査に際しては、きわめて微妙な意味合いを質問することが必要でもある。そこで、話者の条件を厳密に統一するのではなく、当該地点において言語感覚の優れた方をお願いすることとした。

なお、本調査表では、「方言の副助詞」が、当該地点で、どのような言語行動として行われているかを網羅的に記述してもらうことをねらいとしている。したがって、副助詞相互の歴史的な対立や推移、あるいは位相差などについて十分な検討を行ってはいない。また方言副助詞の意味体系を厳密に体系化する調査表でもない。

しかし、全国規模で統一調査表により、「方言の副助詞」を特集した企画は、これがはじめてのはずである。この資料集がひとつのきっかけとなって、方言の副助詞に関わる研究が今後格段に発展することを願ってやまない。